

つながる彩

VOL.5

光、にんじん畑

12/12 Wed. 南 孝信さん/彩誉にんじん @岸和田



岸和田4Hクラブ

2018年3月に世界初の生鮮食品売場をもつ無印良品としてオープンした、無印良品 イオンモール堺北花田。その記念として近畿地方限定のレトルトカレーが発売されました。商品名は、『素材を生かした彩誉にんじんとチキンのカレー』。大阪生まれの彩誉(あやほまれ)にんじん、じゃが芋、鶏肉がごろごろ入った、やさしい味わいのカレーです。

その彩誉にんじんを地域ブランドとして推奨し、産地化と販売促進に取り組んでいるのが“岸和田4Hクラブ”のみなさん。20代～30代の若い農家さん10名ほどで構成されています。

冷たい風が吹く12月中旬、4Hクラブの畑では彩誉にんじんがすくすく育っています。4Hクラブのみなさんはそれぞれにこことは別の自分の畑を持っていて、春菊やキャベツ、水ナスなどを育てるかたわら、こうして集まって一緒に畑の世話をしているのだとか。街ではスーツを着て働いてそうなお兄さんたちが、広い畑で土だらけの長靴を履いているのが少し不思議。みなさん明るくて、のびのびと楽しそうに作業していらっしゃいました。

「Hands、Head、Heart、Healthの頭文字を取って4Hです」

そう教えてくれたのは、岸和田4Hクラブ現会長の南孝信さん。32歳の若手農家さんです。4Hとは、農業の改良と生活の改善に役立つ腕(Hands)を磨き、科学的に物を考えることのできる頭(Head)の訓練をし、誠実で友情に富む心(Heart)を培い、楽しく暮らし、元気で働くための健康(Health)を増進するという、同クラブの4つの信条の頭文字を総称したもの。「4Hのみんなが集まったら、彩誉にんじんをどうやって盛り上げていこうか話し合います。メンバーで育て方とかの考え方が違ったりとかもあるんですけど、質がばらつかないように統一していかなあかなって話してます」



定例会は月一回。その他にもみんなでご飯に行ったり、夜遅くまで語り合ったりするそうで。

「先輩のほうがやっぱり育て方とかよう知ってるんで、農業で迷ったときに教えてもらったりとか……。けっこう農業って個人個人でやるような仕事が多いんですけど、4Hクラブがあるとみんなで集まって今の状況とか話し合えるんで、行き詰ったりとかストレスになってたりするときに仲間と喋ると、助けられます」

「今回の台風では、みんな被害に遭ったので。助けられるときはみんなでビニール張ったりして助け合ってたけど、自分らの畑も片付けなあかんから、大変な時期でしたね」

孤独な作業もある農業の仕事。仲間と話すことが心の支えになり、助け合うことで頑張れるものもあるのかもしれない。そういえば“助ける”の“Help”も、“H”から始まるんですね、南さん。



おいしいってなんだ

「おいしい」とは味が甘いか旨味だとかそういうことだけではなく、育てられ方や食べ方、そこに宿るものを頭で感じたり心で感じたりすることで成り立っているのではないかと私たちは考えます。おいしい野菜を求めて日々試行錯誤を重ねる農家の南さんにも、私たちのこのテーマを一緒に考えてもらいました。

「僕、自分がしたいことがあって。いろんな事情があっていつもお腹いっぱいになられへん子どもって、ようけ居るじゃないですか。そういう子らに、自分が作ったもんをお腹いっぱい食べてもらいたいと思いますね」

「安くてもおいしくない、お腹いっぱいになるまで食べたいと思えへんから。ほんまにおいしいもんを、お腹一杯食べてほしいな。そういうもんを作っていきたい」

その答えを聞いて、胸がぐっと震えるのを感じました。南さんがつくる彩誉にんじんは、甘くてやわらかくて、にんじん特有の癖が無く、“衝撃のにんじん”と称えられるほどのおいしさ。その裏には、南さんのあたたかな想いがぎゅっと詰まっていました。私たちはもっともっと生産者さんの言葉を買う人のもとに届けて、生産者さんにとっても買う人にとっても幸せになれる市場を目指していきたいと考えています。



光のかけら

南さんの畑で取材をしていると、1台の軽トラックが脇に停まりました。出てきたのは作業服と長靴が素敵なおじいさん。

「大先輩の木下さんです。農家で勲章もらった人です」

南さんに紹介されたのは、木下良三さん、76歳。平成26年度農事功労者として紫白綬有功章を受章されました。この日は

「なにしてるんかと思って」と、偶然そばを通りかかったそうで。

「すごいやろ、南くんのにんじん畑。この辺でいちばん出来良いですわ」にこにこ嬉しそうに話す木下さん。

「ビニールハウスを先駆けて始めた、ほんまにすごい人です。弟子もいっぱい居ます」

そう教えてくれた南さんの木下さんを見る目がきらきらと輝いています。木下さんが現れた途端に、朝からずっと暗く曇っていた空に突然太陽が顔を覗かせ、暖かい光がにんじん畑に降り注ぎました。私たちはそんな不思議なタイミングと映画のような光景に、そして木下さんの神様のような雰囲気、私たちは立ち尽くしたまま、じっと聞き入ってしまいました。

「大阪で最後に残る農業は、ここ岸和田や! と思てんねん」

岸和田の風土を心から愛する木下さん。言葉を聞きながら見る風景が、ぐんと違って見えます。冗談を交えながらの会話、にんじん畑に響く笑い声。ほんの10分ほどのこの時間を、私たちはきっと忘れられません。

「この世に産んでもらったら、一生がんばらなあかん。そんで、楽しんでやらなあかん」

木下さんの言葉には奥行きが感じられ、私たちはまだそのすべてを理解できていないように思います。哲学者のようなたたずまいでずっと遠くを見つめる木下さんのひとかけらが、南さんや、彼を師とする数々の農家さんに宿っているのでしょう。

農家として生きるわけ

21歳で奥さんと結婚し、4人のお子さんと賑やかに暮らしている南さんに、農家になった理由を聞いてみました。

「家でこもってるより、自然の中で身体動かして仕事してるほうが好きなんです。実際農業の仕事やってみて、自分に合うなと思いました」

「もうひとつの理由なんですけど……。お世話になった先輩の農家さんにあこがれて、自分もそうなりたと思ったんです。

朝早く仕事して、家族とゆっくり過ごす、そういう農家の暮らしが良いなって」

畑に来てくれた南さんのお子さんも、みんな身体をめいっぱい使って自由ににんじん畑を走り回ります。奥さんもよく農作業を手伝うのだとか。家族と仕事とが密接に存在する農家という職業に、魅力を感じた南さん。アスファルトの上でスーツを着て働くのが当たり前になっている現代の中、生き方としての農家の魅力に共感する人が多くなっているのにも頷けます。



彩り誉れるにんじん畑

どうして南さんのにんじん畑はこんなにも美しいのでしょうか。ふさふさと豊かに揺れる葉、やわらかい黒い土、泥のにおい、濃い緑色を若葉色に染める光、風。“ずっとここに居たい”と思ってしまう不思議な魅力が、南さんの畑にはありました。

南さんという人を知ろうとすると、たくさんの仲間や家族、先輩が姿を見せてくださいました。岸和田4Hクラブのみなさんに対しても、木下さんに対しても、「お世話になっている、助けられている」という謙虚な姿勢を持ち続ける南さん。

そのまっすぐな誠実さがまわりの人を惹きつけ、その豊かな魅力がにんじん畑にも映るのでしょう。

仲間と家族と、助け合い励ましあいながら生きていく。ひとりでは成し遂げられない“おいしさ”が、光あふれるにんじん畑にやさしく宿っていました。



撮影：平野 愛（写真家） <http://photoandcolors.jp>

住まい・暮らし・人の撮影から執筆まで行う。自然光とフィルム写真にこだわったフォトカンパニー「写真と色々」代表。

編集後記

ご一家の到着を待つ倉庫の中で、取材班のみでエア暖炉を囲んだ時間。その後10分間だけ射し込んだ光の美しさが忘れられません。(I)／おみやげに両手いっぱいのにんじんを頂きました。毎日のスープと、葉は天ぷらに。(O)／にんじん畑に現れた木下さん(レジェンド)は、食堂のことを横文字でなんというか思い出せず、みんなで考えた挙句、レジェンドの思い出したかった答えはカフェではなく「カフェー！」... その答えがとってもかわいかったなあ(H)／取材中の録音があるのでご興味があれば聞いていただきたい。僕らがいた映画のような景色をより感じていただけます。よく笑いましたが、何度も言葉を吞んでいます。(M)

2019.1.26 取材・テキスト・デザイン
無印良品 イオンモール堺北花田 発行

無印良品